

講演

微生物学からみた初期グローバリゼーション..

二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い

ヨハネス・プライザー||カペラー

小澤 実 訳

古植物学、動物考古学、遺伝学という新しい方法論に基づく研究が、古代そして初期中世における「転移可能な生物」(biological transfers)の事例を次々に発見しつつあります。それらの交換を加速させているのが巨大帝国とそのネットワークです。生物学は、人間文化を経由した種の拡大や置き換えに対して「人間を通じた拡散」(hemerochory)という用語を用います。そこには「動物による拡散」(zoochory)と呼ばれる、家畜や人間に付き従う種による分配も含まれています。特定の種を、意識的に導入するか、それとも欲してないにもかかわらず導入す

るかの間でも区分が可能です。このような現象——近代の「グローバル化した」世界においてホットな議論の対象となる——が、古代と中世の多様な生態圏にどの程度影響を与えているのかは更なる探究トピックとなるでしょうが、私たちが今想定しうるのは、当時にあつてすら、意図的にせよ知らず知らずにせよ(例えば「生物侵入者」を伴うことによつて)、程度の差こそはあれ人間活動による変化を被っていない、「いまだ手付かずの」景観などどこにも存在したことはなかったということです。



図版 1 : 500 年から 900 年のアフロ・ユーラシア世界における主要交易路 (map: J. Preiser-Kapeller, ÖAW, 2020; basemap: google earth)

こうしたあらゆる転移可能な有機体 (organic transfers) という「招かれざる通行人」のなかには「微生物叢」(microbiomes)、すなわち人類その他の生物に定着する全微生物からなる総体も含まれているとして間違いありません。ここには病原体 (pathogens) も含まれていました。その中には、最初こそ新しい「生活条件」に適應する必要がありますが、一旦適應すれば動物や人間に壊滅的な影響を与えるものもありました。例えばカイル・ハーパーは最近のモノグラフで、古代末期の地中海地域に関するある種の「自然との、望まれない結託」について論じています。そのような結託を通じてローマ人は、亜熱帯域から北極圏に至る帝国領域内で、「病原菌の進化という隠された力を日のもとに晒すであろう疾病生態学を創り出した」(created a disease ecology that would reveal the hidden power of the evolution of pathogens) のです。

二世紀の気候変動と「アントニヌスの疫病」

この時代における大規模な疫病と気候変動との間には密接な関係が認められます。「ローマの気候最温暖期」(Roman climate optimum) が一五〇年頃にはるかに不安定な時期に移行しましたが、その頃にいわゆる「アントニ

ヌスの疫病」がローマ帝国を襲いました。一六五年前から一八〇年前です。同時代人の記録によれば、その起源は、現在のイラクにあるパルティアの首都セレウキアークテシフォンをローマ軍が略奪したことに求められます。アポロン神殿も略奪を免れなかったために、神の復讐を引き起こしたのだとされました。インド洋を超えてこのメソポタミアの交易センターに持ち込まれたある病原体に、ローマ兵士らは罹患したと考えられます。これ以前の一六〇年ごろに、今日のイエメンでそのような疫病が報告されていました。祖国に帰還する軍団とともに、この病原体はローマ帝国に侵入し、水路と陸路を通じて地中海全域に広がりました。同時代人——そのうちの一人は著名な医師ガレノス——による疫病の記述によれば、飛沫感染で拡大し高い伝染性を持つ天然痘ウイルス (*orthopoxvirus variola*) によって引き起こされる天然痘を示唆しているようです。ローマのような大都市では毎日何千人もの死者が出、総計で帝国人口の二〇パーセントにのぼる人々がこの疫病の犠牲となったと考えられます。マルクス・アウレリウス・アントニヌス(治世一六一—一六九。それゆえ「アントニヌスの疫病」と名付けられる)の義理の息子にして共治帝ルキウス・ウェルスは、この病で死にました。このような(ほぼ間違いなくあったであろう)人口減少は帝国の経済と社

史苑(第八一卷第一号)



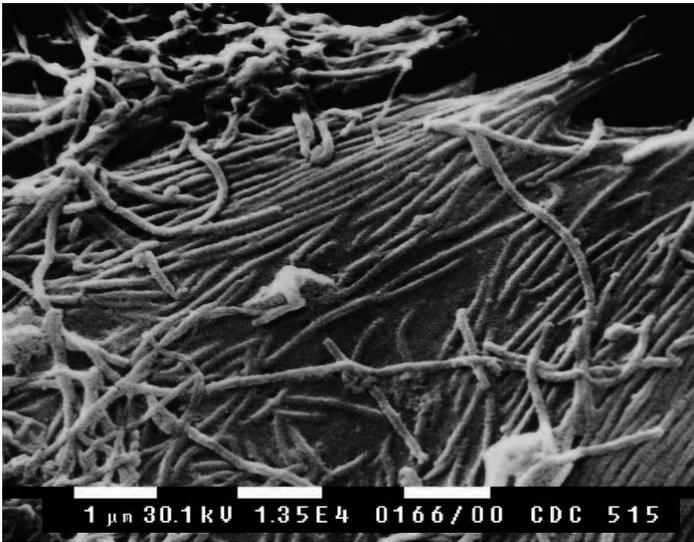
図版2:皇帝マルクス・アウレリウス(161-180)とその義兄弟にして共治帝ルキウス・ウェルス(161-169)。罹患した波の時期は異なるが、両名とも「アントニヌスの疫病」で死去したと考えられる。(https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Marcus_Aurelius_and_Lucius_Verus,_British_Museum_(1126915950_4).jpg)

微生物学からみた初期グロバリゼーション…二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い (ブライザー・カペラー)

会に劇的な影響を与え、以前にもまして帝国の歴史上混乱を極めた時代へと突入しました。しかしこの疫病を生き延びた人々は、一生涯免疫を獲得し、その結果、数年後の一八〇年ごろにはこの疫病はさしあたり消滅しました。

三世紀の「キプリアヌスの疫病」

しかし、極端な気候が続くことになる「三世紀の危機」の最中である二四九年ごろ、いわゆる「キプリアヌスの疫病」が発生しました。その名称は、現在チュニジアと呼ばれる地域のカルタゴ司教をとめた、キリスト教著述家キプリアヌス（二〇〇―二五八頃）に因んでいます。彼を含む同時代人によれば、この疫病は東アフリカからエジプトを経由して持ち込まれ、二四九年にはアレクサンドリアに、二五一年にはローマに到達しました。第二波は二六〇年頃起こり、当時はローマ属州であった今日のルーマニアに到達しました。この疫病に関する様々な記述を検討した研究者の中には、天然痘が改めて流行したことに疑いを挟む人もいます。というのも、流行したとなれば、それ以前の数世代が蓄積してきた免疫が再び失われてしまったからに他ならないのですが、それはあり得ないのではないかと考えるからです。別の理論はインフルエンザ・ウイルスに



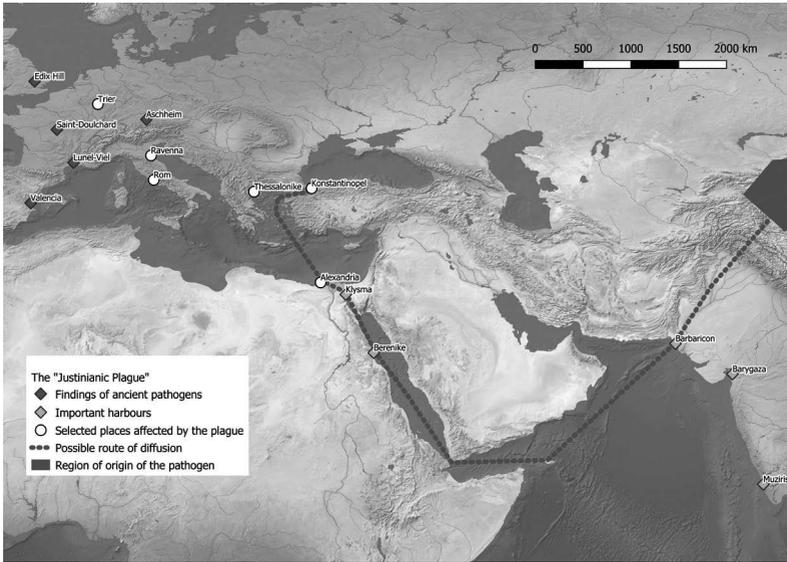
図版3：ウイルス性出血熱の原因の一つとされるエボラウイルスの電子顕微鏡写真 (https://de.wikipedia.org/wiki/Ebolafieber#/media/Datei:Ebola_Virus.jpg)

焦点を定めています。「スペイン風邪」と呼ばれたその壊滅的な潜在能力は、第一次世界大戦末期に全世界で五千万人の死者を出しました。しかし、カイル・ハーパーによれば、この三世紀の疾病にとってはるかに可能性の高い候補はウイルス性出血熱 (hemorrhagic fever) です。それは大量出血を伴う症状であり、ブニヤウイルス (the Bunya virus)、ラッサウイルス (Lassa virus) を含むアレナウイルス (arena viruses)、エボラを含むフィロウイルス (Filoviruses) といった系統の病原体が想定されます。それらは齧歯類や羊やヤギのような家畜を自然の宿主とし、ダニ、サシチョウバエ、蚊のような昆虫によって、フィロウイルスの場合はヒトからヒトへしばしば媒介されます。これらのウイルスは天然痘ほどの感染力はなかったかもしれませんが、死亡率の増加には手を貸したでしょう。いずれにせよローマ帝国の危機は悪化する一方でした。

六世紀から八世紀の「ユスティニアヌスの疫病」

三世紀末以降、地中海ではある程度安定した気候が継続し、二五〇年以上、大きな疫病の発生はありませんでした。しかしその後、五四〇年から七五〇年にかけてのいわゆる「ユスティニアヌスの疫病」が古代末期世界を以前とはすっ

かり変えてしまったのです。この疫病の原因はペスト菌 (Yersinia pestis) でした。一八九四年、香港で発生した際に、アレクサンドル・イエリサン (Alexandre Yersin, 1863-1943) が発見したことに因む名前です。第一宿主は齧歯類で、ノミが宿主間を媒介しました。しかしこの病は齧歯類から人間に移動し、しかるのち、ノミを通じて媒介とは別に人間の間でも、時として空気感染を通じてすら蔓延するのです。一八九四年に特定された病原体が一四世紀から一七世紀にかけて疫病 (黒死病)、そして六世紀から八世紀にかけての疫病 (ユスティニアヌスの疫病) と同一であるかどうかについては、長い研究上の論争があります。しかしその中世後期の疫病と古代末期の疫病の犠牲者の遺体に残る病原体をDNA解析することで得られた新しい結果は、先ほどの同定を確実なものとなりました。二〇一四年のデヴィッド・M・ワグナーとその同僚による六世紀に関する権威ある研究は、ドイツのアッシュハイムとアルテナーディングクの墓列 (いずれもミュンヘン地区) から価値ある情報を引き出しました。彼らが再構成した遺伝情報 は、紀元前一〇〇〇年から紀元後五〇〇年の間に、今日の中華人民共和国の領域、より正確に言えばチベット高原で発生したことがほぼ間違いないペストの痕跡に触れています。五三六年に始まる寒冷期 (いわゆる「古代末期小氷期」



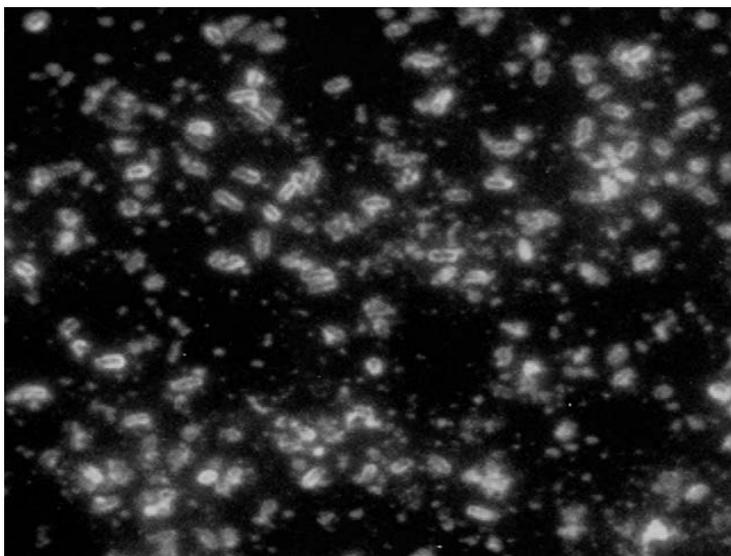
図版4：6世紀ペスト禍の想定され得る起源地と拡散ルートを示した地図 (map: J. Preiser-Kapeller, ÖAW, 2020)

(Late Antique Little Age) 後のアフロ・ユーラシア世界のかなりの部分に広がる、殊の外寒冷湿潤な気候は、東アジアの齧歯類の間に広がったペストが、他の齧歯類や人間に遷移するための好条件となりました。その後ペストは、交易路を西へと進み、数年をかけてインド洋に拡大しました。五四〇年には紅海を経てエジプトに達しましたが、そこに隣接するアクスム（現在のエリトリアやエチオピア）やヒムヤル（現在のイエメン）のような諸国もまた、おそらくはクリスマ港（現在のスエズ）を通じて被害を受けました。五四一年、ペストは地中海のペルシオン（現在のポトサイドから南東に三〇キロ）に到達しました。保菌したネズミや人間は帝都に供給するための定期穀物船団とともにエジプトからコンスタンティノープルへと移動し、ユスティニアヌス帝の治世であった五四二年に発生しました。当時まだ利用されていた交易輸送路を通じて、ペストは中東、地中海、そしてアイルランドに至るまで拡大しました。ローマ帝国で予期せぬ拡大を成し遂げたイエネズミが、疫病拡大の「インフラ」の役割を果たすことになったのです。

同時代史料によれば、コンスタンティノープルのペストは、五〇万の住民のうち二五万人から三〇万人を死者に変え、ローマ帝国、ペルシア帝国、それらの隣接国家では数

百万以上の犠牲者を出したと言われていました。その後、ペストは二〇〇〇年間にわたり定期的に振り返り、アフロ・ユーラシア西部の人口を削ぎ落とししました。地中海東部では、感染爆発以前の人口の半分から三分の一へと絶え間なく減少し、八世紀末以降によりやく人口が回復し始めると言われてきました。しかし「ユステイニアヌスの疫病」は本当にそれほどの破壊力を持っていたのでしょうか。二〇一九年のクリスマス直前にリー・モルデカイとそのグループが刊行した論文によって議論は沸騰しました。ここでは「ユステイニアヌスの疾病」は「とるに足らない感染爆発」と呼ばれています。パピルス、碑文、貨幣の頻出性に関する統計分析のみならず（農業の活力に関する）花粉データを検討した彼らは、六世紀の疾病が中世末期の「黒死病」のように三〇パーセントから五〇パーセントの人口喪失を引き起こし——さらにいえば数百万の犠牲者を出した（がしかし中国のかなりの部分では人口減はなかった）一九〇〇年頃の東アジアの感染爆発のようにもっと大きい数字であることに疑念を持っています。この見方に対して強く反対する研究者もいます（いくつかの研究が刊行準備に入っています。例えばモニカ・グリーン）の「数が重要ではないとき。ユステイニアヌスの疫病に対する見方の変化」。たとえ疫病の致死率が想定よりも低いものだったとしても、人々の

史苑（第八一卷第一号）



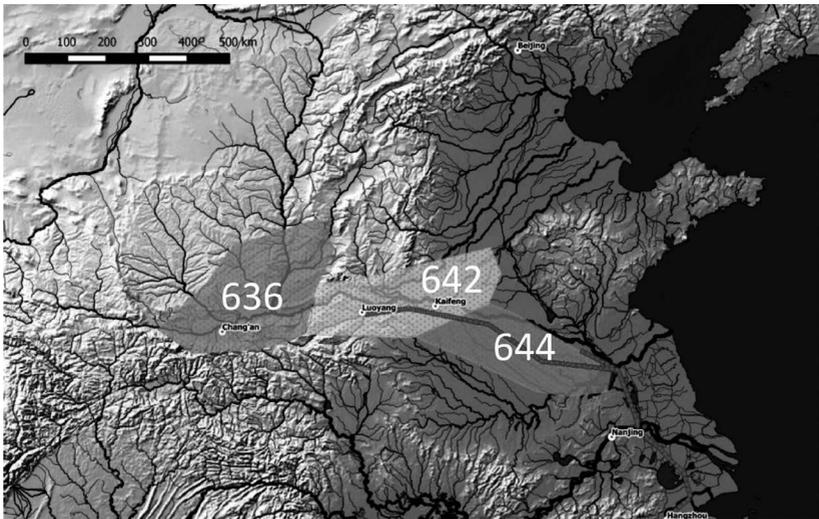
図版5：顕微鏡で見たペスト菌 (from: https://commons.wikimedia.org/wiki/Yersinia_pestis?uselang=de#/media/File:Yersinia.jpg)

微生物学からみた初期グロバリゼーション…二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い (ブライザーIIカペラー)

不安と日常生活の動揺が引き起こす社会的、経済的、心理的な諸結果もまた考慮に入れなければならないでしょう。六世紀の人々が疫病の原因と拡大について全くわからなかったことを思うに、人々の心理に触れる後者の論拠はコロナウイルスをめぐる現状を想定した場合理解できるように思えます。いずれにせよ、「ユステイニアヌスの疫病」の規模とインパクトに関する議論は今後も続くことになるでしょう。

六世紀から一〇世紀の古代末期中国と日本の疫病

全体として、二世紀、三世紀、六世紀の三つの疫病の病原体は長距離交易ネットワークを通じて地中海をはるか隔てた外部から持ち込まれました。それら病原体は、その「故郷の地」に近い地域においてよりも、ローマ帝国とその隣接地域において当該病原体を「未経験の」人々に対して一層苛烈な効果を持っていたのかもしれない。こうした地域は、ある病原体が、最初は大規模に、その後は少なくとも部分的に、中和された既存の免疫（「免疫学的記憶」(immunological memory)）を克服しない限りにおいて、より頻繁に、しかしさほど暴力的ではない疫病の発生にさらされてきたかもしれません。例えば、「ユステイニ



図版 6 : 636 年から 644 年の唐帝国における運河ネットワーク沿岸首邑間の疫病の拡大 (map: J. Preiser-Kapeller, ÖAW, 2020)

アヌスの疫病」や「黒死病」と比較しうる感染爆発の情報は、一九世紀の大爆發以前では、ペスト菌の原産地にはるかに近い中国に関してはさほど明確ではありません。ペストと認定されたかもしれない疾病は五四九年に、つまり地中海で起こった流行直後の中国南部で記録されています。しかしながら、それに加えて、中国は繰り返し（ペスト以外の）疫病の被害を受けています。高祖李淵の治世（六一八―六二六）では、高熱を伴う疫病により数百万の犠牲者が出たと言われています。六三六年から六四四年の間に別の疫病が、長安と洛陽といういずれも数十万の人口を擁する帝都の間の運河に沿って広まり、多くの生命を奪いました。その運河とは、唐帝国の南北をつなぐために歴代皇帝が六世紀末以来数百キロメートルにわたって建設してきたものでした。ポスト・ローマ期地中海世界においてそうであるように、帝国インフラによるネットワークもまた病原体に新しい拡大経路を提供したのです。九〇七年に唐王朝が終焉を迎えるまで、天然痘を含むさらに一八度の大規模な疫病が言及されています。それらの病原体の中には、新たに開発を進めた南方の亜熱帯からきたものもありましたし、帝国内の馬の頭数を間引く動物疫病を含む、中央アジアのステップからのものもありました。



図版 7 :
日本の古都奈良にある高さ 15
メートルの銅製仏像。この国
を襲った最初の天然痘流行直
後の 749 年に完成された。
(photo: J. Preiser-Kapeller,
2019)

微生物学からみた初期グローバリゼーション…二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い（ブライザー＝カペラー）

相対的に孤立した住民にとつては、新しい病原体との接触の結果は、一層致命的であり得ました。七三五年から七三七年にかけての日本では、新羅からの一隻の船が持ち込んだと言われる天然痘が、人口面、経済面、そして政治面での危機を引き起こしました。この危機は、以前にもまして仏教（これも朝鮮半島から伝来しました）に対して注意を向ける結果へと導きました。この点においても、海上接続の強化ならびに奈良（現在の大阪の近く）のような新しい帝都という形で集住空間の統合が、疫病の拡大に資することになったのです。一二〇〇年頃までに、天然痘は、平均して一〇年から二〇年ごとに総計二八回繰り返され、日本の人口回復を妨げ続けました。

修道士や王妃が中国から西洋にカイコ蛾の幼虫を密輸し、カリフがオレンジの木をインドからイラクへ船で運ばせた一方で、人間や動物に便乗するはるかに小さい生物学上の密航乗船者らが、古代末期におけるグローバルな絡み合いにおける最も強力な「不当に利益を得る者」になったようです。世界の諸地域間での交換による予期しない結果の一つはアフロ・ユーラシア世界の「微生物学的統合」(microbiological unification)でした。その動きに逆らうことは、当時最も偉大である帝国群ですら無力のままだったのです。

参考文献

- Mark Achtman, “Multiple time scales for dispersals of bacterial disease over human history”, in Nicole Boivin, Rémy Crassard, and Michael Petraglia (eds.), *Human Dispersal and Species Movement. From Prehistory to the Present*, Cambridge, 2017, pp. 454-476.
- Margaret L. Antonio et al., “Ancient Rome: A genetic crossroads of Europe and the Mediterranean”, *Science*, 08 Nov 2019, 366 (6466), pp. 708-714.
- Ole J. Benedictow, *What Disease was Plague? On the Controversy over the Microbiological Identity of Plague Epidemics of the Past*, Leiden-Boston, 2010.
- Nicole Boivin, “Proto-Globalisation and biotic exchange in the Old World”, in Boivin et al. (eds.), *Human Dispersal and Species Movement*, pp. 349-408.
- Delmer M. Brown (ed.), *The Cambridge History of Japan, Vol. 1: Ancient Japan*, Cambridge, 1993.
- Ulf Büntgen et al., “Cooling and societal change during the Late Antique Little Ice Age from 536 to around 660 AD”, *Nature Geoscience*, 9 (2016), pp. 231-236.
- Bruce M. S. Campbell, *The Great Transition. Climate, Disease and Society in the Late-Medieval World*, Cambridge, 2016.
- Jean-Pierre Devroey, *La Nature et le roi. Environnement, pouvoir et société à l'âge de Charlemagne (740-820)*, Paris, 2019.
- Michael Dols, “Plague in early Islamic history”, in *Journal of American Oriental Society*, 94/3 (1974), pp. 371-383.
- Mark Elvin, *The Retreat of the Elephants. An Environmental History of China*, New Haven-London, 2004.
- William W. Farris, *Population, Disease, and Land in Early Japan, 645-900*, Cambridge, 1985.
- Monica H. Green (ed.), *Pandemic Disease in the Medieval World. Rethinking the Black Death = Medieval Globe*, 1 (2014).
- Monica H. Green, “The Globalisations of Disease”, in Boivin et al. (ed.), *Human Dispersal and Species Movement*, pp. 494-520.
- Monica H. Green, “When Numbers Don't Count: Changing Perspectives on the Justinianic Plague”, *Eidolon*, 18 November 2019 [https://eidolon.pub/when-numbers-dont-count-56a2b3c3d07].

- John Haldon, Hugh Elton, Sabine R. Huebner, Adam Izdebski, Lee Mordechai, and Timothy P. Newfield, “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (2): Plagues and a crisis of empire”, *History Compass*, 2018 [online: doi.org/10.1111/hic3.12506] .
- John Haldon, Hugh Elton, Sabine R. Huebner, Adam Izdebski, Lee Mordechai, and Timothy P. Newfield, “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (3): Disease, agency, and collapse”, *History Compass*, 2018 [online: https://doi.org/10.1111/hic3.12507] .
- Kyle Harper, *The Fate of Rome. Climate, Disease and the End of an Empire*, Princeton-Oxford, 2017.
- Fritz H. Kayser et al., *Medizinische Mikrobiologie*, Stuttgart, 2010.
- Bernhard Kegel, *Die Ameise als Tramp. Von biologischen Invasoren*, Munich, 2013.
- Bernhard Kegel, *Die Herrscher der Welt: wie Mikroben unser Leben bestimmen*, Cologne, 2015.
- Marcel Keller et al., “Ancient Yersinia pestis genomes from across Western Europe reveal early diversification during the First Pandemic (541–750)”, *PNAS*, June 18, 2019, 116 (25) , pp. 12363-12372.
- Johannes Koder, *Gemüse in Byzanz Die Versorgung Konstantinopels mit Frischgemüse im Lichte der Geoponika*, Byzantinische Geschichtsschreiber, Ergänzungsband 3, Vienna, 1993.
- Dieter Kuhn, *Ostasien bis 1800* (Neuer Fischer Weltgeschichte 13), Frankfurt am Main, 2014.
- Hyunsook Lee, “Environment, Epidemics and Power in Early Medieval China”, 2010 [online: http://independent.academia.edu/marisadurham] .
- Emmanuel Le Roy Ladurie, “L’unification microbienne du monde (XIV–XVII siècles)”, in *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, 23 (1973), pp. 627-696.
- Mark Edward Lewis, *China’s cosmopolitan Empire. The Tang Dynasty*, Cambridge, Mass.-London, 2009.
- Lester K. Little (ed.), *Plague and the End of Antiquity: The Pandemic of 541–750*, Cambridge, 2006.
- Robert B. Marks, *China: An Environmental History*, Lanham, 2017.
- Michael McCormick, “Rats, communications, and

- plague: toward an ecological history”, *Journal of Interdisciplinary History*, 34-1 (2003), pp. 1-25.
- Anthony McMichael, *Climate Change and the Health of Nations. Famines, Fevers, and the Fate of Populations*, Oxford, 2017.
- Lee Mordechai, and Merle Eisenberg, “Rejecting catastrophe: The case of the Justinianic Plague”, *Past & Present*, 244-1 (2019), pp. 3–50 [https://doi.org/10.1093/pastj/ptz009] .
- Lee Mordechai, Merle Eisenberg, Timothy P. Newfield, Adam Izdebski, Janet E. Kay, and Hendrik Poinar, “The Justinianic Plague: An inconsequential pandemic?”, *PNAS*, December 17, 2019 116 (51), pp. 25546-25554 [https://www.pnas.org/content/116/51/25546] .
- Pest! Eine Spurensuche. Ausstellungskatalog Westfälisches Landesmuseum*, Darmstadt, 2019.
- David W. Phillipson, *Foundations of an African Civilisation. Aksum and the Northern Horn 1000 BC-AD 1300*, Woodbridge-Rochester, 2012.
- Johannes Preiser-Kapeller, “Byzantinische Geschichte, 395-602”, in Falko Daim (ed.), *Byzanz. Historisch-kulturwissenschaftliches Handbuch* (Neuer Pauly, Supplement 11), Stuttgart, 2016, pp. 1-61.
- Mary E. Prendergast u. a., “Reconstructing Asian faunal introductions to eastern Africa from multi-proxy biomolecular and archaeological Datasets”, *Plos One*, August 2017 [online: https://doi.org/10.1371/journal.pone.0182565]
- Timothy Power, *The Red Sea from Byzantium to the Caliphate: AD 500-1000*, Kairo, 2012.
- Edmund Russell, *Evolutionary History. Uniting History and Biology to understand Life on Earth*, Cambridge, 2011.
- Sergio Sabbatani, and Sirio Fiorino, “La peste antonina e il decline dell’Impero Romano. Ruolo della guerra partica e della guerra marcomannica tra il 164 e il 182 d.C. nella diffusione del contagion”, *Le Infezioni in Medicina*, 4 (2009), pp. 261-275.
- Sergio Sabbatani, Roberto Manfredi, and Sirio Fiorino, “La peste di Giustiniano (prima parte)”, *Le Infezioni in Medicina*, 2 (2012), pp. 125-139.
- Sergio Sabbatani, Roberto Manfredi, and Sirio Fiorino, “La peste di Giustiniano (seconda parte). L’influenza

微生物学からみた初期グローバルパンデミック：二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い（フライザー＝カペラー）

- dell'epidemia sulla formazione dell'Impero Islamico”, *Le Infezioni in Medicina*, 3 (2012), pp. 217-232.
- Peter Sarris, “Climate and Disease”, in Erik Hermans (ed.), *Companion to the Global Early Middle Ages*. Leeds, 2020, pp. 511-538.
- Walter Scheidel (ed.), *The Science of Roman History*. *Biology, Climate, and the Future of the Past*, Princeton – Oxford, 2018.
- Michael Sigel et al., “Timing and Climate Forcing of Volcanic Eruptions for the Past 2,500 Years”, *Nature*, 523 (2015), pp. 543–549.
- Dionysios Ch. Stathakopoulos, *Famine and Pestilence in the Late Roman and early Byzantine empire. A systematic Survey of Subsistence Crises and Epidemics*, Aldershot, 2004.
- George D. Sussmann, “Was the Black Death in India and China?”, *Bulletin of the History of Medicine*, 85/3 (2011), pp. 319-355.
- Akihito Suzuki, “Smallpox and the Epidemiological Heritage of Modern Japan: Towards a Total History”, *Medicine History*, 55-3 (2011), pp. 313–318 [<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC3143877/>]
- Conrad Totman, *Japan. An Environmental History*, London-New York, 2014 [『黒澤令子訳』『日本人は自然とのよびに関わってきたのか：日本列島誕生から現代まで』築地書館 二〇一八年] .
- Costas Tsiamis, Eleni Poulakou-Rebelakou, and Effie Petridou, “The Red Sea and the Port of Clysma. A possible Gate of Justinian’s Plague”, *Genus*, 66/2 (2009), p. 209-217.
- Ch. von Verschuer, *Le commerce entre le Japon, la Chine et la Corée à l’époque médiévale, VII^e-XVI^e siècle*, Paris, 2014 [『河内春人訳』『モノが語る日本 対外交易史：七―一六世紀』藤原書店 二〇一一年] .
- David M. Wagner et al., “Yersinia pestis and the Plague of Justinian 541-543 AD: a genomic Analysis”, *The Lancet Infectious Diseases*, 14/4 (2014), pp. 319-326. (オーストリア学術アカデミー研究員)

訳者後書き

本稿は、二〇一九年一月に立教大学招聘研究員として来日した、オーストリア学術アカデミー研究員であるビザンツ史家ヨハネス・プライザーIIカペラー博士が、彼が主宰するサイト「もう一つの中世」(Das andere Mittelalter)に掲載した論考 (<https://www.dasanderemittelalter.net/news/the-microbiology-of-early-globalization/>)の翻訳である。訳者は一度粗訳を私家版として公開したが、博士自身がその後の研究とSNSでの議論を受けて増補したバージョンと改めて対照し、本稿では追加部分を加え、誤訳を可能な限り修正した。

プライザーIIカペラー博士の業績については前号で紹介したので繰り返さない(小澤・諫早、『史苑』八〇―二、一―四一―三四頁)。ビザンツ史家であるとともに中世グローバルヒストリーの伝道者でもある彼は、二〇一五年『ローマとカール大帝の彼方』(*Jenseits von Rome and Karl dem Grossen. Aspekte der globalen Verflechtung in der langen Spätantike*, Wien: Mandelbaum, 2018)と一言う一般向け小著を刊行した。本書は、四世紀から九世紀のアフロ・ユーラシア世界の歴史を、ヨーロッパ半島を立脚点として構造的に素描する「ことば」カロリング帝国の成立もまた、ヨーロッパで起きた孤立的現象ではなく、グロー

バルな構造変化の中で達成された試みであることを提示する。そこでは疫病と政治権力との関係も重要な論点となっており、本稿はそのエッセンスをまとめたものと言える。

初期中世と言う時代における諸帝国の拡大と疫病との関係を扱う本稿は、当然のことながら、グローバル化した世界で今なお猛威を奮っているコロナウイルスとの連関でも注目を浴びるものである。しかし博士が本稿の元となる書籍を執筆した時点でコロナウイルスはまだ感染爆発どころか発生すらしていなかった。現状の世界がどうあるにせよ、人間活動と疫病の間には不可分の関係があり、そうした関係もまた、グローバルな規模で流動変化する世界の動因となりうることを歴史的に示した、決して流行に乗った軽薄な論考ではないことは付言しておきたい。

とはいえ、この初期中世における疫病の人間社会への影響については、本稿でも触れているように、現在、力のある学者がしのぎを削って新しい成果を世に問うている分野でもある。ローマ帝国や初期ビザンツのみならず、ヴァイキングの拡大と天然痘の移動の可能性を示唆した研究(Barbara Mühlemann et al., “Diverse variola virus (smallpox) strains were widespread in northern Europe in the Viking Age”, *Science*, Vol. 369, Issue 650 (24 Jul 2020); online: <https://science.sciencemag.org/>

微生物学からみた初期グローバリゼーション…二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い（プライザー・カペラー）

content/369/6502/eaaw8977) や中世後期における疫病と環境との関係をアフロ・ユーラシア規模の交換状況の中で論じた議論（諫早庸一「一三—一四世紀アフロ・ユーラシアにおけるペストの道」『現代思想』四八—七二（二〇二〇）、一三七—一四四頁）なども、学界だけではなく一般メディアでも注目を浴びている。ひよっとすると数年後には、プライザー・カペラー博士の記述をそっくり塗り替えるような成果が出されているかも知れない。グローバルヒストリーにとって最も重要な疫病と人間社会との関係に関する再検討の起爆剤となったカイル・ハーバーやブルース・キャンペルの原著の翻訳の話も聞こえてくる。プライザー・カペラー博士の論考がそうであるように、グローバルヒストリーの枠組みでは近代国家の国境の意味合いは絶対的なものではなく相対的な役割に変化する。日本においても、より広い世界を念頭に置き環境と人間生活の關係から歴史を再構成する試みが今後広がっていくことが望まれる。

（本学教授 小澤実）